

茨城県看護協会優良看護職員表彰

手術室中央材料部 渡辺一雄師長

6月21日、水戸市で開かれた茨城県看護協会の総会で、優良看護職員として手術室中央材料部の渡辺一雄師長が表彰されました。

「手術室は、直接患者さんと触れ合うことはない職場ですが、表彰はありがたいです。今までやってきたスタンスで仕事を続け、後輩の育成にも力を入れたい」と話していました。

渡辺師長が看護の道を目指したのは、22歳の時。それまで自動車関連の企業に勤めていたが、「祖父母が具合が悪く、医療関係者となって面倒を看たい」と准看護学校に通い、25歳で卒業。27歳の時に城西病院に入職しました。

平成元年に看護師となり、城西病院では、療養病棟に配属された時期もありますが、ほとんどが手術室での勤務といえます。

「事故などの緊急手術が入ったり、産科で分娩を行っていた時には夜中に呼び出されることはしょっちゅうでした」と振り返ります。「常に経験の上に、心遣いと技術の必要な部署です。手術で機械のトラブルなどを想定して、常に2系統の手術方法を考えないといけない。そして、それに付随する機械も完璧な状態で用意しないといけない」と心構えを語ります。



「当然、手術の立ち会いは神経を使います。それと同じように、機材のメンテナンスも神経を使います。手術用機材は普段は1割しか使用しません。あとの9割は、いつ使うことがあってもいいように、滅菌とメンテナンスは怠りません。機械や機材は常に進化しています。常に十分把握し、手術で万全に使えるようにしていくのも役目です」と話します。

20数年前、20歳代の女性が脳梗塞で搬送されてきました。手術の結果、意識も言葉も回復して退院しました。その女性は、搬送中の意識のない中で、渡辺師長を「ジャガイモ看護師」として覚えていてくれた。約30年前、レクリエーション大会で30歳くらいの男性が倒れ、心肺停止状態になりました。ちょうどその場に居合わせ、病院と連絡を取りながら心肺蘇生を施して城西病院に搬送。約1カ月で歩いて退院できるまでになったといえます。

「交通事故など緊急で手術を受ける患者さんが多く、後遺症もなく助かるのは非常にまれです。この2つのケースは、すごくうれしく印象に残っています」と話す。

最後に「経験を積み、徐々に目標も高くなって地道にステップアップする。年数と回数をこなすことで、相手に伝える心や道具のスキルアップにつながる」と、後進に向けて話していました。

平成27年7月9日